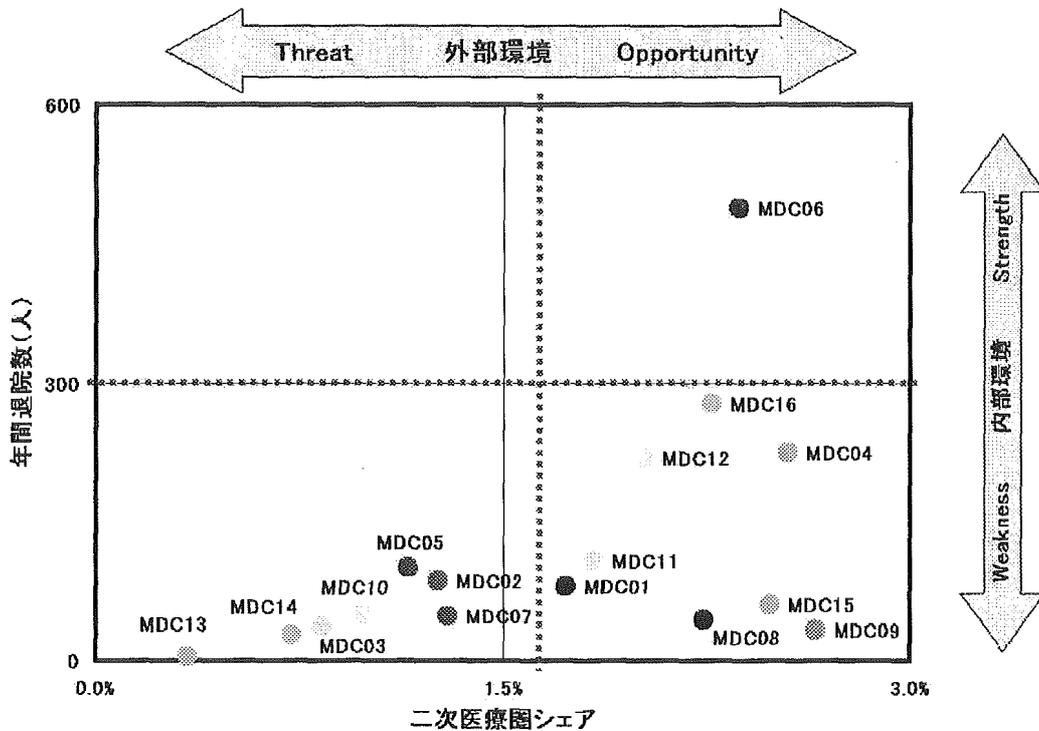
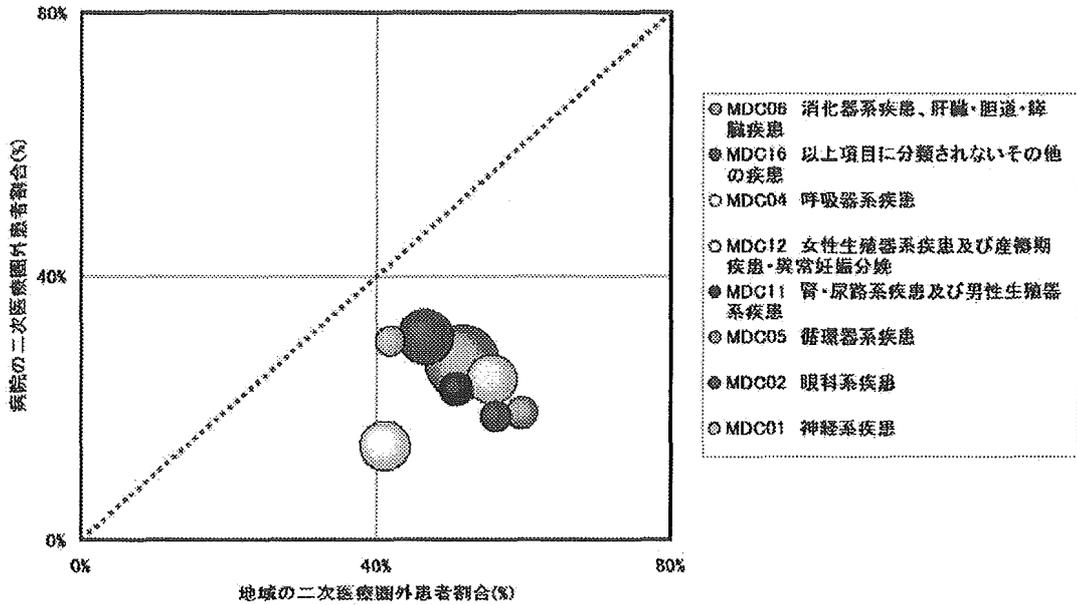


分析 3-1 短期入院 SWOT 分析



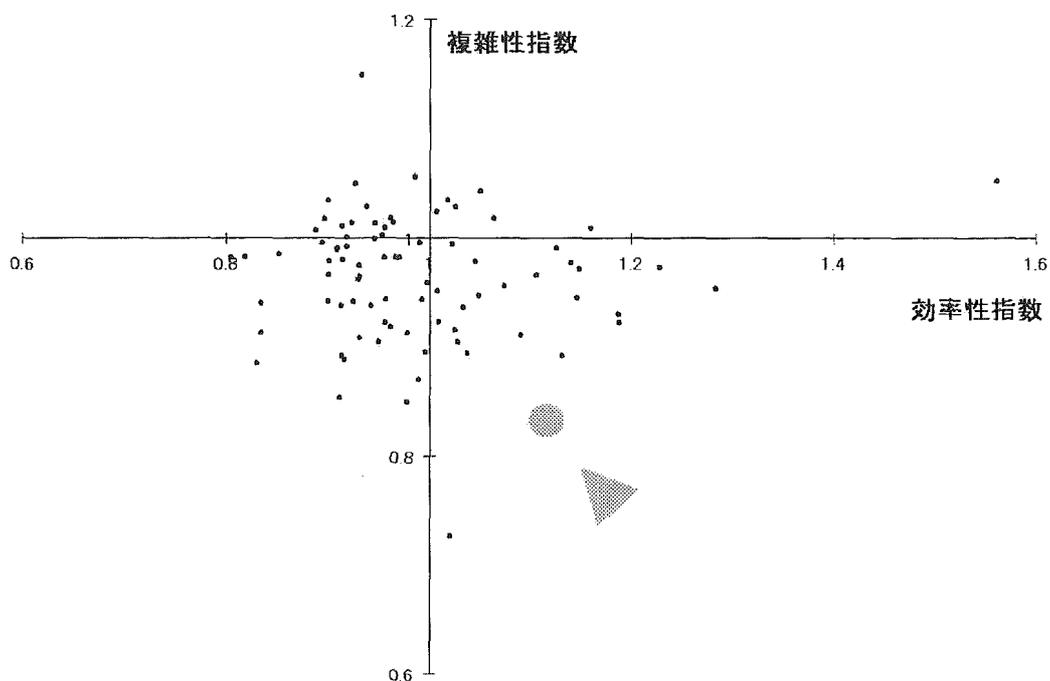
- この医療機関の診療科別 SWOT 分析を行うと、MDC06 消化器系診療科の患者数が多く、かつ地域シェアも比較的大きいことから、消化器系分野においては積極的攻勢に出てより診療の充実を図っていくことが経営戦略的に重要であるといえよう。
- 一方、MDC01 脳神経系、MDC04 呼吸器系、MDC08 皮膚科系、MDC09 乳腺外科系、MDC11 腎・泌尿器科系、MDC12 産婦人科系、MDC15 新生児等、MDC16 その他外傷等などでは、患者数はあまり多くないものの地域におけるシェアは比較的大きく、地域医療の重要な部分を担っている可能性が高い。従って、これらの分野については、「段階的施策」として、診療内容を徐々に充実させていく対策が必要となる。
- これに対して、その他の診療科は厳しい状況にあり、「専守防衛」を基本方針とし、場合によっては、「撤退」も考慮する必要があるだろう。

分析 4-1 短期入院圏外患者分析



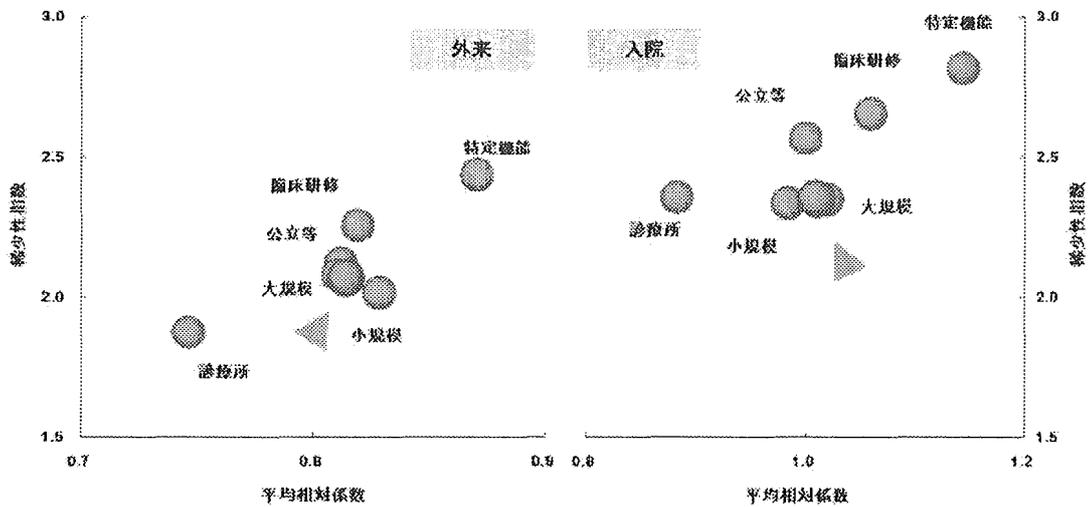
- この医療機関の属する二次医療圏は、二次医療圏外から入院してくる急性期患者が非常に多いことが特徴で、多くの診療科で二次医療圏外から入院してくる患者の割合が40%を越えている。都会型診療圏と考えられ、発達した交通機関を利用して比較的遠方からの受療が多いようである。
- ところが、この医療機関の二次医療圏外患者の割合はほぼ30%以下であり、地域の標準的な傾向と比較して非常に小さくなっている。そのために、すべてのバブルが図中の破線より大きく下方に位置している。地域密着型の医療機関の特徴であるといえよう。
- 診療科単位では特に呼吸器系の患者の二次医療圏外患者の割合が低いことが特徴である。喘息患者の入院が多かった分析と合わせて考えると、地域呼吸器系疾患診療のプライマリケアに相当する部分を多く担当していると考えられる。
- この医療機関の医療圏の狭小さは将来ビジョンの設定に大きく影響するであろう。地域密着型のプライマリケア重視医療機関となるか、診療圏の拡大を図ってやや高度な急性期医療を担うことを目指すかの選択が必要となる時期がいずれ近いうちにくるのではないだろうか。

分析5 効率性・複雑性分析



- この医療機関のケースミックスの複雑性指数は、全特定機能病院の平均を 1 としたときに約 0.82 であり、特定機能病院の平均より 18%ほど複雑性の低い症例が入院していることがわかる。特定機能病院の平均よりはかなり重症度の低い入院患者が多いと捉えられる。
- 一方、ケースミックスを補正したときの在院日数の短さを示す効率性指数は、全特定機能病院の平均を 1 としたとき、1.10 であり、特定機能病院の平均に比較して 10%ほど効率の良い医療を提供していると言える。

分析6 稀少性・相対係数分析



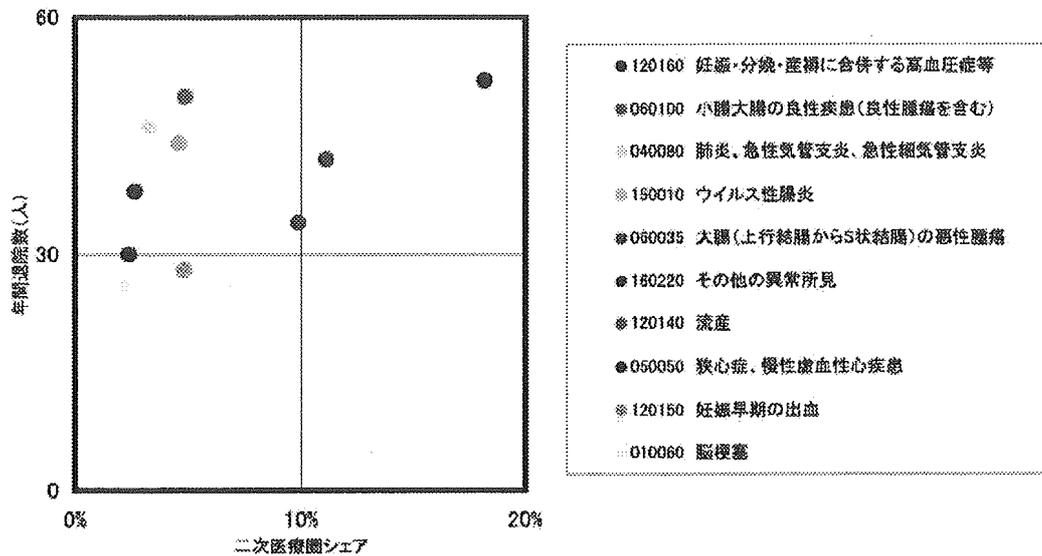
- この医療機関の外来患者の平均相対係数は0.81、稀少性指数は2.07となっている。これらの値はほぼ民間大病院の外来の平均と近い。この医療機関の外来患者の平均像は、民間大病院とほぼ同等の重症度と多様性があるといえる。
- 一方、入院患者をみると、平均相対係数は1.13、稀少性指数は2.55となっていて、相対係数、稀少性指数とも民間大病院の平均と同等である。この医療機関の入院患者の重症度と多様性は、民間大病院とほぼ同等であるといえる。

分析レポート例4

**地方都市の
中規模急性期病院**

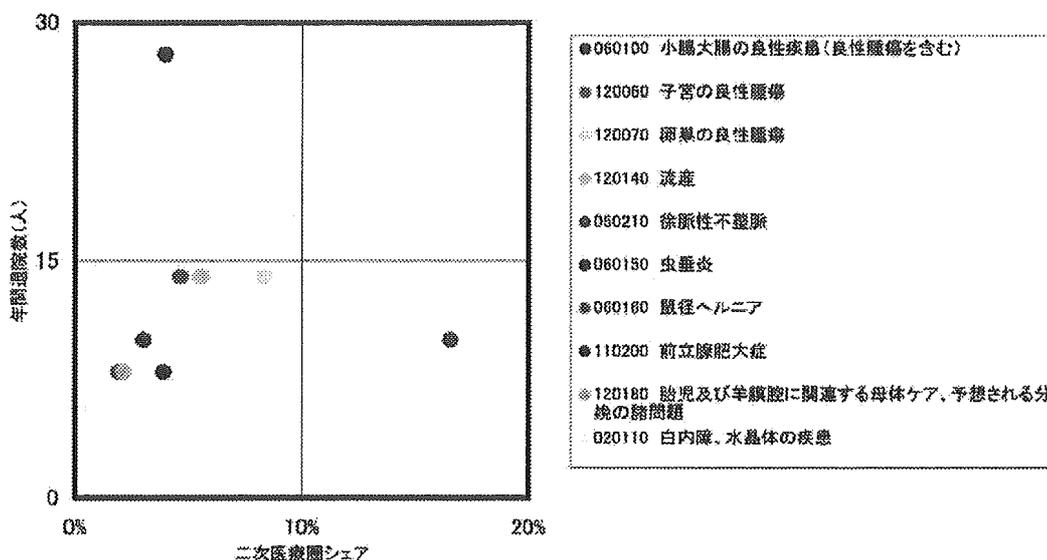
人口 20-30 万人程度の地方都市にある一般病床
数 200 床程度の中小急性期病院を想定した分析

分析 1-1 DPC 別短期入院二次医療圏シェア分析



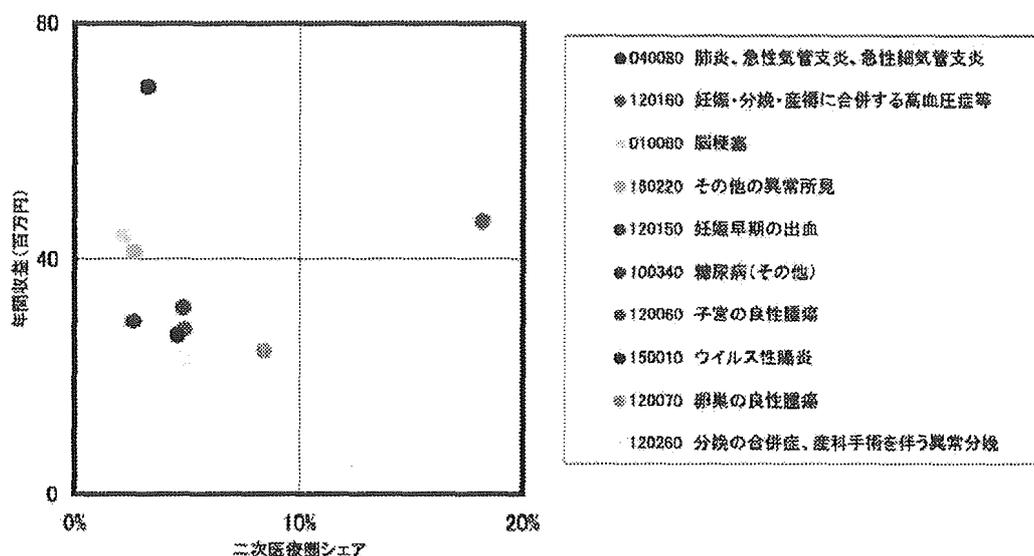
- この医療機関の短期入院患者のトップ 10 は、産婦人科系、消化器系が多く、これらの分野を中心とした医療を提供している地方都市の中規模医療機関の典型的な例と言える。
- マーケットシェアからは、DPC120160 妊娠等の合併症、DPC12014100 流産が 10%-20%前後で、中規模の医療機関としてはかなり高く、この地域での産婦人科系診療で重要な役割を果たしていることが読み取れる。また、DPC060035 大腸癌は 10%前後と他の消化器系疾患よりは大きく、消化管の悪性疾患の治療に於いても一定の役割を果たしていると言える。
- 一方、その他の疾患については、二次医療圏シェアは 5%以下であり、同じ二次医療圏内の他の医療機関と競合関係に有ることが予想されるが、逆に言えば、二次医療圏シェアの拡大による患者数の増加も期待出来ることが示されている。

分析1-2 DPC別短期手術入院二次医療圏内シェア分析



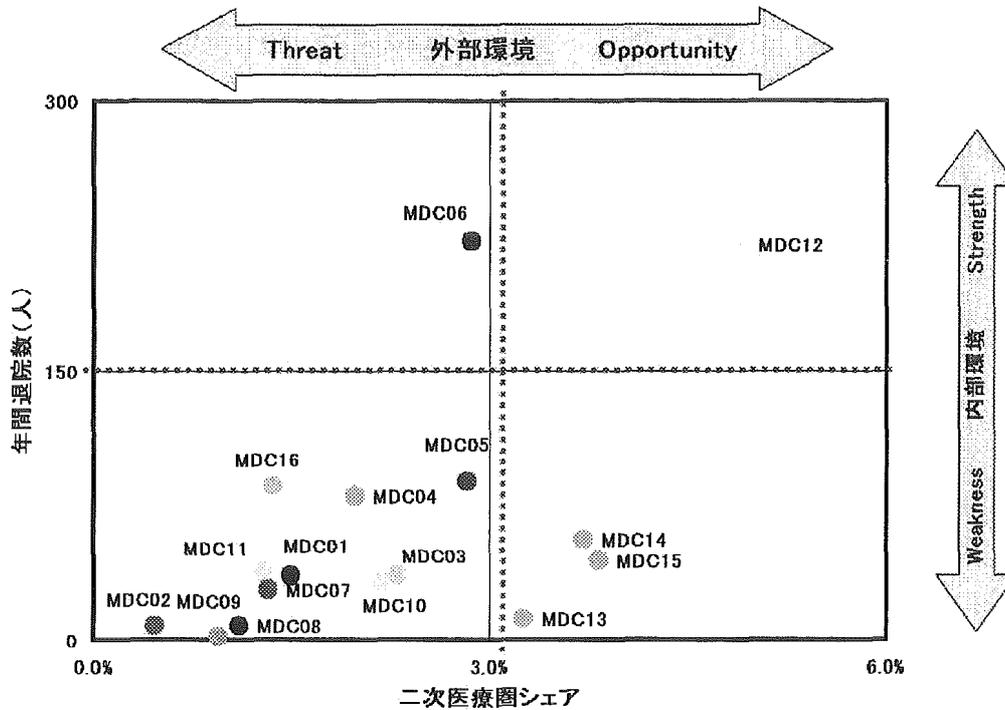
- 手術入院患者の状況を見ると、この医療機関の急性期医療の別の側面が明らかとなる。手術入院患者のトップ10では、やはり消化器系、産婦人科系が多いが、不整脈、前立腺肥大症、白内障等広汎な分野での手術治療も行っていることがわかる。それほど手術数は多くはないが広い分野の手術を実施しているようである。
- マーケットシェアの視点から見ると、DPC050210 徐脈性不整脈の二次医療圏シェアが15%以上と飛び抜けて大きい。症例数は多くはないが、地域における不整脈治療の重要な役割を果たしていることが推察される。
- 一方、この医療機関の中心である産婦人科系、消化器系疾患では、いずれの疾患も二次医療圏シェアは5%前後と低く、外科的治療におけるこの医療機関の地域における重要性はあまり高くないようである。難度の高い手術が必要な症例などは、他の医療機関に転院しているのであろう。
- 不整脈などのごく一部を除いては、重症度のあまり高くない診療からプライマリケアに近い部分の診療をおもに担当している医療機関であることが推察される。

分析2 DPC別短期入院二次医療圏内シェアー収益分析



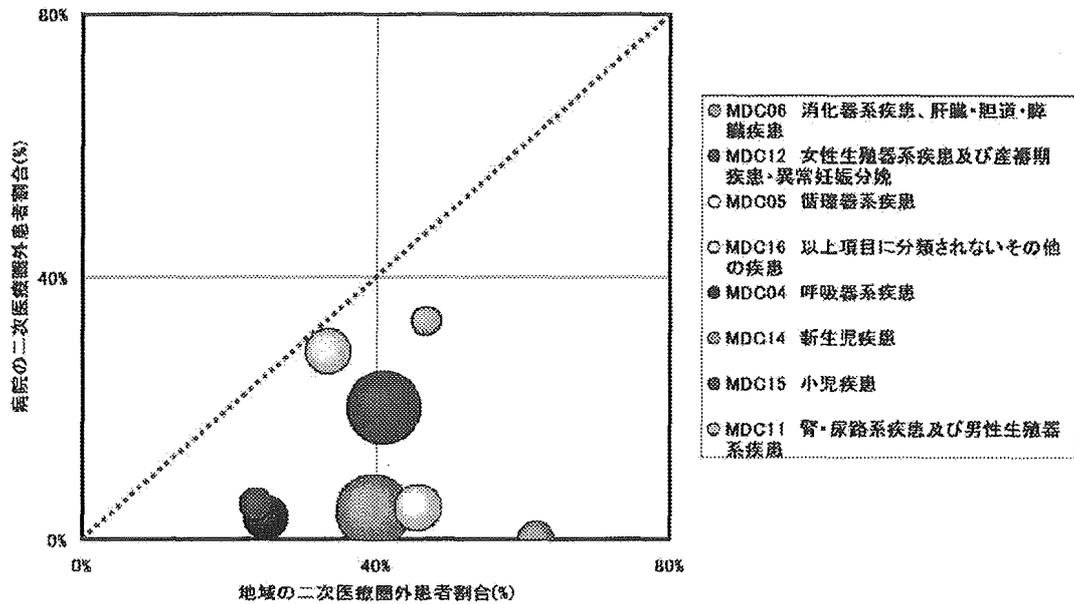
- 退院患者数では消化器系の疾患が多かったが、収益面から見ると、在院日数の長い肺炎、脳梗塞、糖尿病等が年間収益に貢献している疾患としてあがってきている。消化器系では、短期入院患者を早く回転させている一方、比較的在院日数の長い肺炎、脳梗塞、糖尿病等の患者が病棟を占有しているようである。
- 二次医療圏シェアを含めて分析すると、収益の大きい肺炎、脳梗塞、糖尿病等は二次医療圏シェアが低いので、これらの部分のシェアの拡大による収益増大が期待されるが、これらの疾患の急性期医療の需要は限定的であるので、急性期医療から亜急性期医療へ重点をシフトする必要がある。
- 一方、手術を中心とした急性期医療を伸ばしたいのであれば、産婦人科系の専門性を高めることも一つの選択枝となるようである。二次医療圏シェアはまだ 10%前後と低いので今後拡大していく余地は有ろう。

分析 3-1 短期入院 SWOT 分析



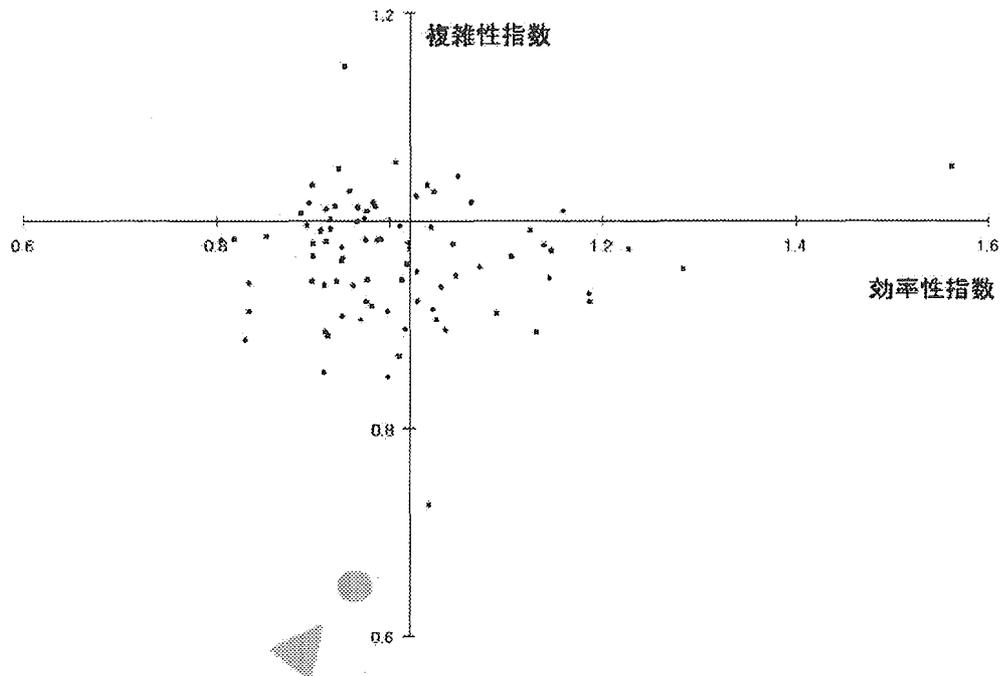
- この医療機関の診療科別に見ると、MDC12 産婦人科系の患者数が多く、地域シェアも有る程度確保している。したがって、この分野においては積極的攻勢に出てより診療の充実を図っていくことが経営戦略的に重要であるといえる。
- 一方、MDC06 消化器系は、患者数は多いものの二次医療圏シェアは3%前後と低く、競合する医療機関が多いことが予想される。いわゆる「差別化戦略」として新規技術の導入、新規機器の購入等を図ることがシェアの維持と拡大に重要となる。
- さらに、MDC13 造血器系、MDC14 小児科系、MDC15 新生児系では、患者数はあまり多くないものの地域におけるシェアは比較的大きく、地域医療の重要な部分を担っている可能性が高い。従って、これらの分野については、「段階的施策」として、診療内容を徐々に充実させていく対策が必要となる。
- 最後に、その他の診療科は厳しい状況にあり、特に、脳神経系、眼科系、皮膚科系、整形外科系等は、「専守防衛」を基本方針とし、場合によっては、「撤退」も考慮する必要がある。

分析 4-1 短期入院圏外患者分析



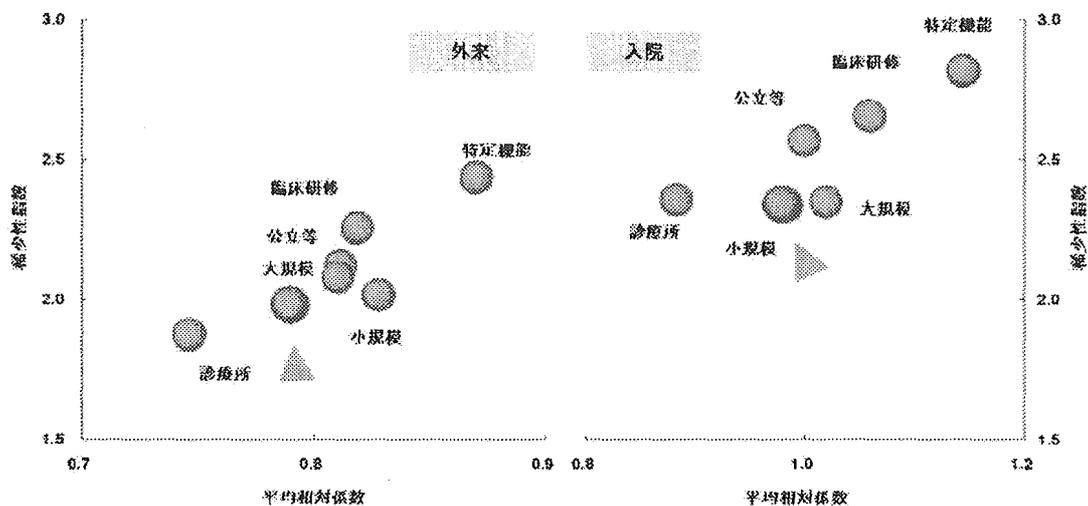
- この医療機関の属する二次医療圏は、二次医療圏外から入院してくる急性期患者がかなり多いようである。消化器系、産婦人科系、循環器系等で 40%前後、新生児疾患では 60%にも達している。この二次医療圏には遠方から入院患者が来院する魅力的な急性期医療機関が多いようである。
- これに対して、この医療機関へ入院してくる二次医療圏外患者の割合は非常に小さく、そのため、図中、全てのバブルが破線より下方に位置している。診療科単位で見ると、患者数の多い消化器系はほとんど全てが二次医療圏内のローカルな患者であり、その次に患者の多い産婦人科系でも二次医療圏外の患者は 20%程度に過ぎない。MDC16のその他外傷等と MDC11の腎泌尿器科系の二次医療圏外患者割合がやや高く、この二次医療圏の水準に近いがその他は、非常に低くなっている。
- これらのことから、この医療機関は二次医療圏内の地域密着型医療を提供していることがわかる。また、この二次医療圏には、二次医療圏外から患者を引きつけるような高水準の医療機関が複数あることが推測されるので、これらの優良医療機関との競合を勝ち残っていくのは厳しいことも予想される。この医療機関の専門性を生かし、産婦人科系等に特化するか、亜急性期医療を主に提供していく医療機関として将来ビジョンを再検討する必要もあろう。

分析5 効率性・複雑性分析



- この医療機関のケースミックスの複雑性指数は、全特定機能病院の平均を 1 としたときに約 0.63 であり、特定機能病院の平均より 37%ほど複雑性の低い症例が入院していることがわかる。特定機能病院の平均よりは重症度の低い入院患者が多いと捉えられる。
- 一方、ケースミックスを補正したときの在院日数の短さを示す効率性指数は、全特定機能病院の平均を 1 としたとき、0.95 であり、特定機能病院の平均に比較して 5%ほど効率の劣る医療を提供していると言える。

分析6 稀少性・相対係数分析



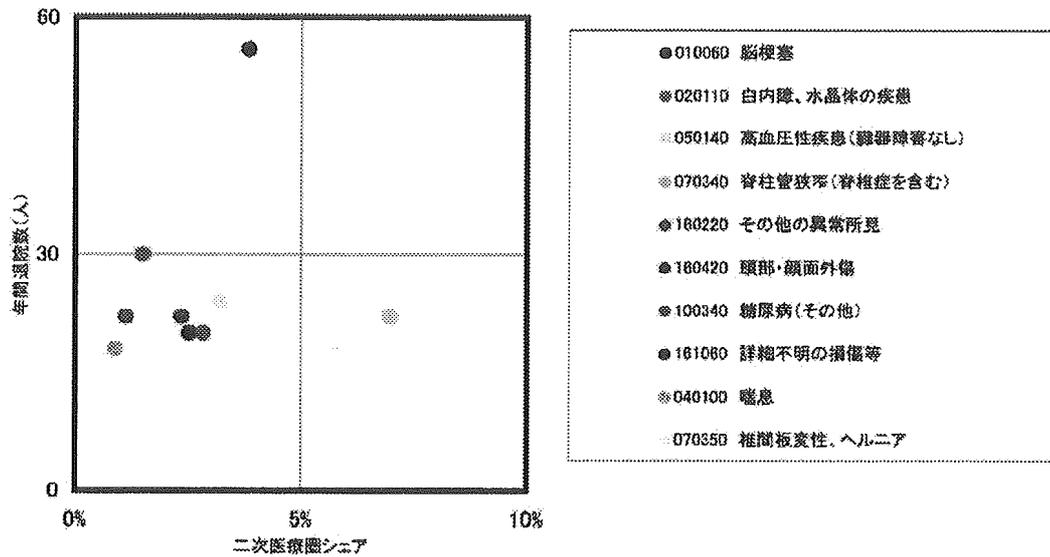
- この医療機関の外来患者の平均相対係数は0.79、稀少性指数は1.98となっている。この値は民間病院より低く、中小病院と診療所とのほぼ中間の値となっている。この医療機関の外来患者の平均像は、重症度、多様性ととも、一般の中小病院より低くこれらと診療所との中間程度であるといえる。
- 一方、入院患者をみると、平均相対係数は0.98、稀少性指数は2.34となっていて、両者ともほぼ民間小病院の平均値と同等である。この医療機関の入院患者の重症度はほぼ民間小病院の平均値と同等であるといえる。

分析レポート例5

亜急性期・療養型病院

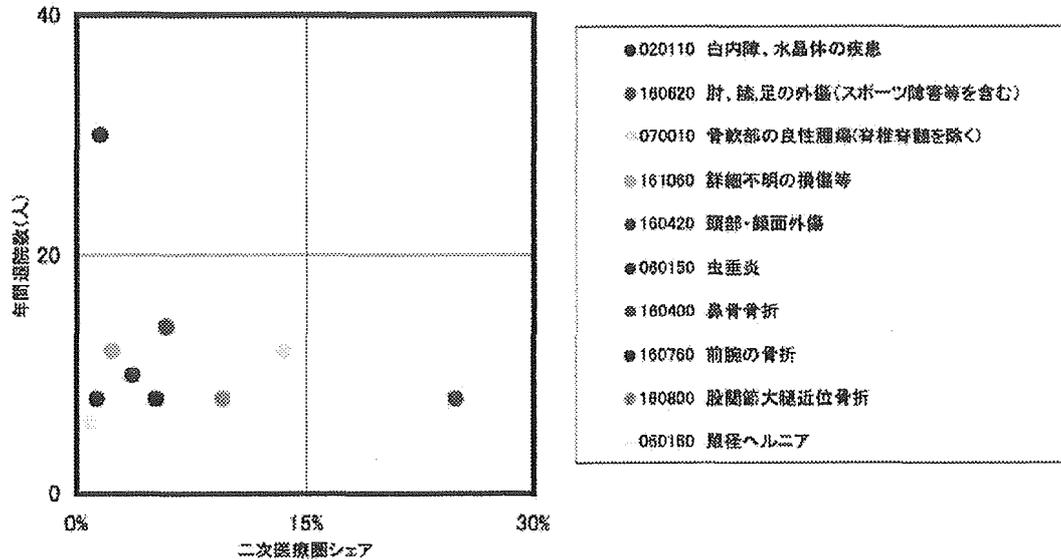
人口 20-30 万人程度の地方都市にある一般病床
数 200 床程度の亜急性期～療養型病院を想定し
た分析

分析 1-1 DPC 別短期入院二次医療圏シェア分析



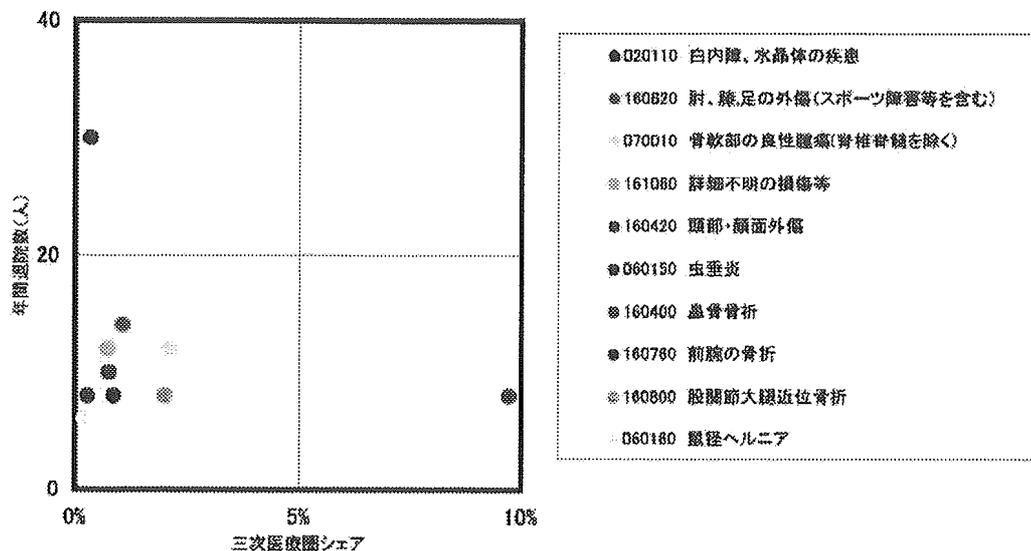
- 短期入院患者のトップ 10 は、脳梗塞、白内障、高血圧、糖尿病等コモンディーズばかりであるが、その中に整形外科系と外傷系の疾患が含まれているのがこの胃腸機能の特徴といえそうである。この医療機関の急性期診療は整形外科と外傷系を中心に広くその他一般診療であるといえる。
- マーケットシェアは DPC070340 脊柱管狭窄と DPC070350 椎間板ヘルニアの二次医療圏シェアが 5%を越えてやや高い以外は、非常に低い。整形外科、外傷系では地域における一定の役割を果たしているようである。

分析 1-2 DPC 別短期手術入院二次医療圏内シェア分析



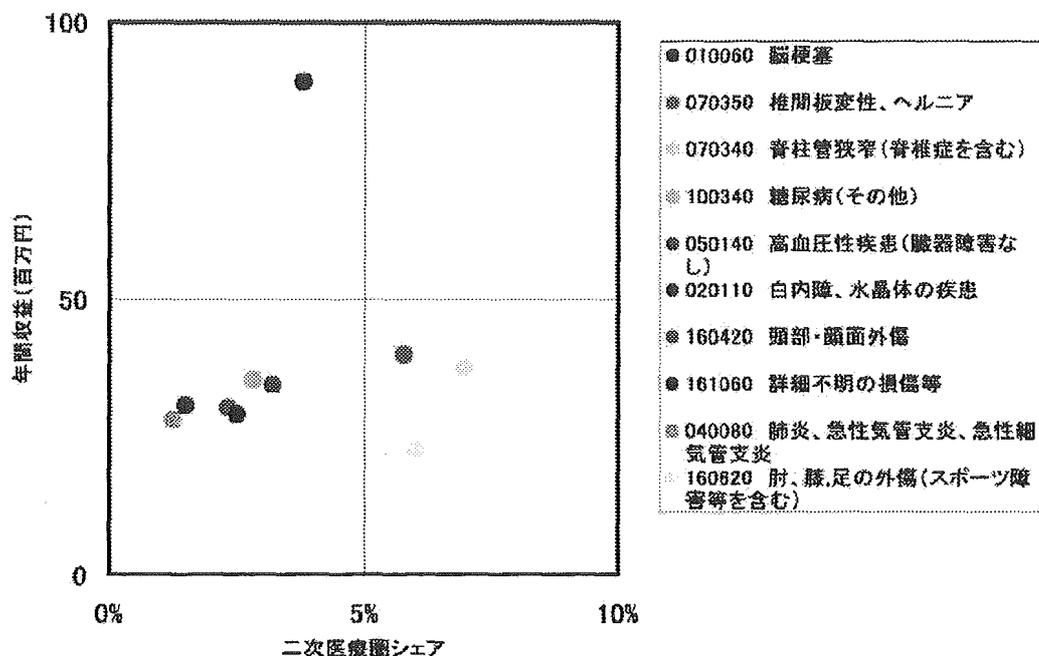
- 手術入院患者の状況は、この医療機関の特徴を明確にしている。白内障がやや多い以外は、症例数的にはどの疾患も年間 10 例前後と少ない。この医療機関が急性期医療機関としてはあまり活動性が高くない様である。しかし、その中では、DPC160400 尾骨骨折、DPC070010 骨軟部良性腫瘍、DPC160800 股関節大腿近位骨折の二次医療圏シェアが 10%を越えて比較的大きくなっている。整形外科、外傷系の急性期医療では地域に於いて重要な役割を担っているようである。

分析 1-3 DPC 別短期手術入院都道府県内シェア分析



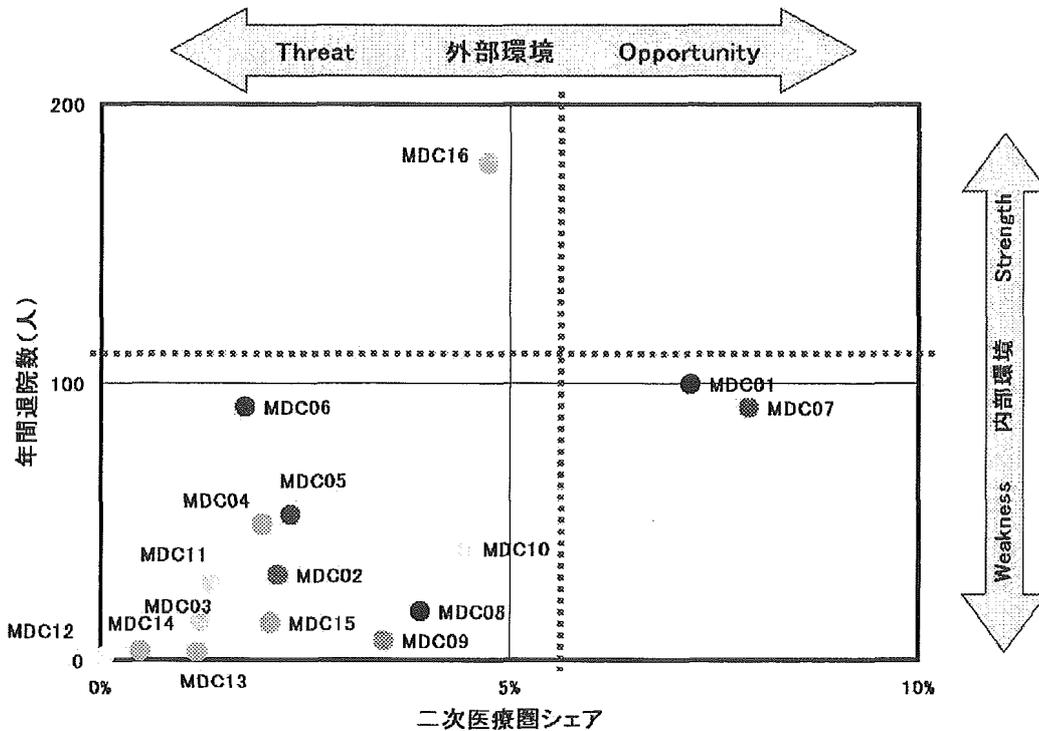
- この医療機関は比較的小規模ながら、DPC160400 鼻骨骨折では三次医療圏内でも 10% 前後のシェアを占めていることは、驚きでもあり、非常に特徴的であると言える。救急等の外傷の診療に大きな力を入れている可能性がある。

分析2 DPC別短期入院二次医療圏内シェアー収益分析



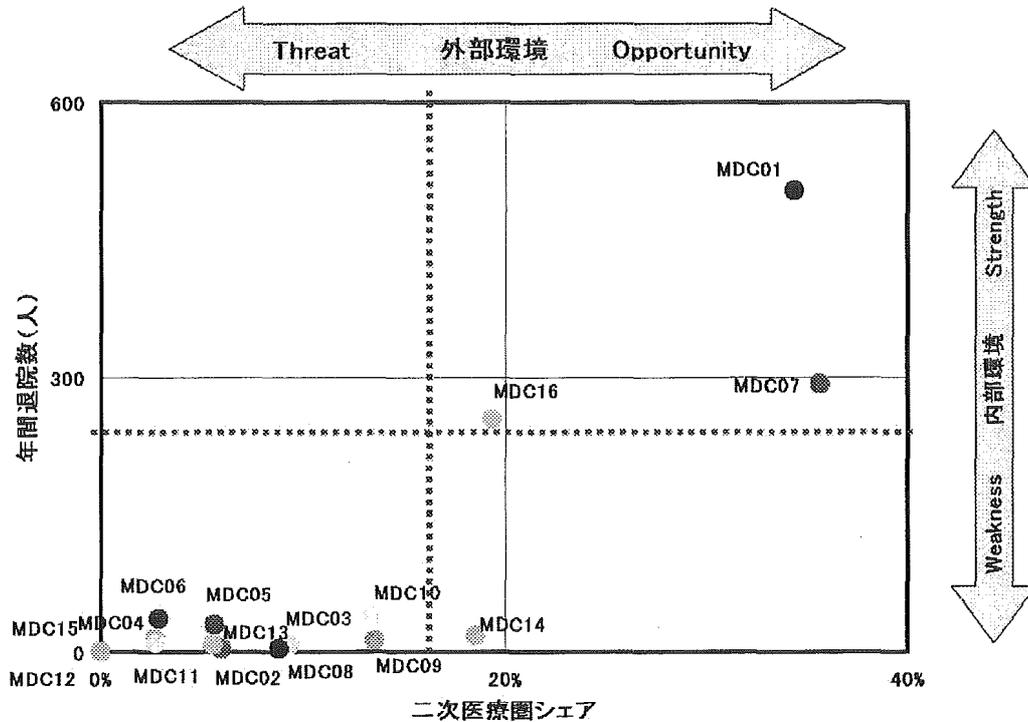
- 医業収益の上位10疾患で見ると、疾患別の在院日数と1日あたり平均医業収益が大きい、DPC070350 椎間板ヘルニア、DPC070340 脊柱管狭窄などの整形外科系疾患が上位に上がってくる。
- 二次医療圏シェアを含めて分析すると、収益の大きい脳梗塞、糖尿病等は二次医療圏シェアが低いので、これらの部分のシェアの拡大による収益増大が期待されるが、これらの疾患の急性期医療の需要は限定的である。
- 一方、手術を中心とした急性期医療を延ばしたい場合は、整形外科、外傷系の専門性を高めることも一つの選択枝となるようである。二次医療圏シェアはまだ10%以下と低いので脊椎疾患等の診療を今後拡大していく余地は有ると考えられる。

分析3-1 短期入院 SWOT 分析



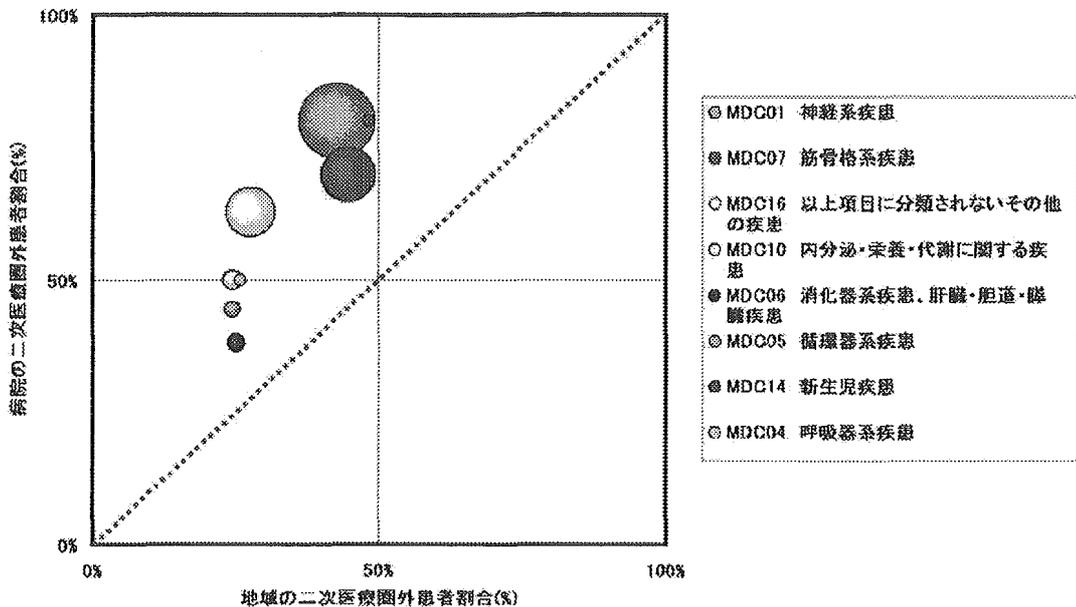
- この医療機関の急性期医療を診療科別に見ると、MDC16 その他外傷系では患者数は多いが、競合する医療機関も多いことが予想されるため、いわゆる「差別化戦略」としてたとえば、救急患者を積極的に受け入れる体制をとるなどによってシェアの維持と拡大を図ることが重要であると考えられる。
- また、MDC01 脳神経系、MDC07 整形外科系では、患者数はあまり多くないものの地域におけるシェアは比較的大きく、地域医療の重要な部分を担っている可能性が高い。従って、これらの分野については、いわゆる「段階的施策」として、診療内容を徐々に充実させていく対策が必要となる。
- 一方、それ以外の診療科の急性期医療は厳しい状況にあり、「専守防衛」を基本方針とし、場合によっては、「撤退」も考慮する必要があるだろう。

分析 3-2 長期入院 SWOT 分析



- この医療機関は長期入院に特徴があるようなので、在院日数 31 日以上入院患者に関して SWOT 分析を試みた。MDC01 脳神経系の患者数が多く、二次医療圏シェアも 40% 近くと非常に大きいことから、脳神経系の長期入院において「積極的攻勢」に出てより診療の充実を図っていくことが経営戦略的に重要であるといえる。
- また、MDC07 整形外科系と MDC16 その他外傷等では、患者数は MDC01 より少ないもののが多く、地域におけるシェアも大きいといえるので、地域医療の重要な部分を担っている可能性が高い。従って、これらの分野については、いわゆる「段階的施策」として、診療内容を徐々に充実させていく対策が有効であるといえる。
- 一方、それ以外の診療科の長期入院では、「専守防衛」あるいは「撤退」が対応方針となる。

分析 4-2 長期入院圏外患者分析



- この医療機関の所属する二次医療圏は、二次医療圏外から入院してくる慢性期患者が比較的多いことが特徴である。二次医療圏外から入院してくる患者の割合を診療科系統別に見ると、脳神経系、整形外科系長期入院患者の 50%弱が二次医療圏外に居住している患者となっていて、その他の診療科でも 20-30%が二次医療圏外の患者となっている。
- 全ての診療科が図中の破線より上方に位置していることから、この医療機関の二次医療圏外患者の割合は、この二次医療圏の中の他の医療機関よりも著しく高くなっていることがわかる。すなわち、この医療機関の長期入院患者の診療圏は同じ二次医療圏内の他の多くの医療機関よりも非常に大きくなっていることがわかる。
- さらに、診療科単位で見ると、MDC01 脳神経系は患者数が多いと共に二次医療圏外からの長期入院患者の割合が 80%近くと非常に大きく、大変広い範囲からの入院患者を受け入れていることがわかる。MDC07 整形外科系、MDC16 その他外傷系も長期入院患者の 70%前後が二次医療圏外からの入院であり、同様に医療圏が非常に大きいと言える。これらの診療分野の長期入院患者が非常に広い地域から入院していることが示されている。